

お米の神様ありがとう

さいたま市立辻小学校 五年
上 崎 凌

僕はよく兄妹ケンカをする。始まりは些細なことなのに、だんだん何でケンカしているのかわからなくなってしまう。

大抵は母の、

「いい加減にしないよ。」

で、終わるのだが、ヒートアップしている時は、ケンカを止める母にも腹が立って、返事さえしなくなるのだ。そうなると子供部屋に閉じこもって一人でブンブンしてしまう。しばらくすると、台所からシューツと勢いのある音が聞こえてくる。我が家のお米の炊ける音だ。我が家はお米を圧力鍋で炊く。シューツという音は、今の僕の気持ちのように何だか怒っているように聞こえる。

それからまたしばらくすると、母が

「少し落ち着いた？」

と、声を掛けてくる。でも僕はそれでも返事をしない。母は後に引けなくなった僕の気持ちがお見通しのように、

「あなたも悪かったところがわかるなら仲直りしてきたら？」

と、言ってくる。

本当は自分も悪かったのがわかっているけど、自分からは謝りたくない。仕方なく妹のところに行って

謝ると、妹も

「もういいよ。わたしも悪かったよ。ごめんね。」

と言って、仲直りする。その後、

「仲直り出来た？」

と、母が、たった今握ったお握りを差し出してくるのだ。

出されたお握りを妹と二人で頬張ると、塩味がふんわりと口の中に広がってくる。ゆっくり噛むと、お米がどんどん甘くなってくる。炊き立てのお米の甘みが僕に幸せな気持ちを運んでくれたようで、今までブンブン怒っていた自分が何だか可笑しくなってくる。

「お握り、美味しいね。」

「熱々で、ほっかほかだね。」

「家のお米はどうして圧力鍋で炊くの？」

「あなたたちに少しでも早くご飯を食べさせたいからだよ。それに、圧力鍋で炊くとお米がもっと甘くなる気がするよ。」

「お母さん、お握りってすごいね。なんでこんなに美味しいのかな？」

「何でだろうね。お握りの中にみんなを笑顔にする神様でも住んでいるのかな？」

「お握り、もう一つ食べたいな。」

話がどんどん弾んで、いつの間にか僕も妹もみんな笑顔になっている。

美味しいお米で握ったお握り。お握りの中の笑顔の神様。いつもいつも僕たちに幸せを届けてくれて本当にありがとう。